

篠原典生 助教

語学留学から始まった

中国での研究者生活。

仏教考古学から東西文化交流史へと

研究の裾野を広げ

その研究成果で

異文化文化理解の礎を築く

高校時代に第2外国語として中国語を専攻。

夏休みに日本モンゴル親善協会主催のモンゴル旅行に参加し、

大草原が広がる光景に心を奪われたという篠原典生先生。

大陸への興味から、高校卒業後は中国・大連に語学留学。

その後自力で入学願書を書くなど苦労しつつ、

いくつかの大学に留学を申請したという。

そして西安市の西北大学に留学。

西安市はシルクロードの起点ともいわれる長安の都である。

多くの歴史遺産が点在する環境の中で学んだことが

考古学の世界に足を踏み入れる第一歩となった。

長安の都で遺跡巡り 仏教考古学から シルクロード研究へ

篠原先生は高校卒業後に中国へ語学留学をした。留学先の遼寧省大連市は日本の近現代史とも深くかわる都市で、市内には旧大連ヤマトホテル（現・大連賓館）などがある。こうした環境下で留学生仲間や言葉の練習相手となってくれた中国人学生達と過ごすうちに、「歴史的にもこのを見る」姿勢が身についていったのだろう。

留学中、いわゆる「留用者」の方々

と一緒に彼らが働いていた炭鉱などを訪れる機会があった。彼らから戦

中・戦後の話を詳しく聞き、また日

本人留用者と中国側関係者たちとが

とても親しげに当時の苦労話に花を

咲かせているのを目の当たりにした

経験から、歴史とは本の中に閉じ込

められた単なる記録では

なく、わたしたちが生きて

る現在につながるもので

あることを実感し、また

同時に歴史の複雑さを考

えさせられ、これが歴史

の勉強を志すきっかけと

なり、その後の研究の大

きな糧ともなっていると思う。

西北大学に入学した当初、中国の

歴史を学ぶつもりだったという。

「一年次は考古学と歴史学の講義

はほとんど同じなので、両方受けて

みたらどうかと勧められたのです。

すると考古学の講義が面白くて、考

古学を専攻することに決めました。

西安市には新石器時代から明清時代

まで、ほぼすべての時代の遺跡があ

り、講義で出てくる遺跡もすぐ近く

にあったことから、大学時代は毎週

末に同級生たちと遺跡巡りをして過

ごしていました」と振り返る。

在学中、西安市内で再開発が進み、

それに伴って発掘調査が至るところ

で行われていたという。工事現場で

は漢の陶片、唐の瓦当、宋や金の磁

器片などがよく落ちていた。西北大

学のキャンパスは唐代長安城の太平

坊にあり、留学生の宿舍の下には実

際寺という仏教寺院遺跡が埋まって



新疆ウイグル自治区にて。



篠原 典生 (しのはらのりお)

西北大学文博学院歴史学部考古学科卒業。北京大学考古文博学院仏教考古学専攻修士課程修了、中外文化交流考古学専攻博士課程修了。中央民族大学民族学・社会学学院考古文博学部外籍教師、ロンドン大学考古学研究所研究員などを経て、2020年より中央大学総合政策学部助教。専門は中国考古学、仏教考古学、東西文化交流史。著書、翻訳書に『西天伽藍記』（蘭州大学出版社、2013。中国語）、石松日奈子著『北魏仏教造像史研究』（文物出版社、2012。中国語）、中国社会科学院考古研究所、京都大学人文科学研究所監修；水野清一、長廣敏雄著『雲岡石窟』第一期、第二期（科学出版社、2014-2016。編集委員、中国語）など。

いたという。
当時は日本との学術交流も盛んで、考古学や美術史の研究者も多く研究に訪れていた。通訳などのお手伝いで調査に同行させていただく機会もあり、学生個人ではあまり行け

ないような遺跡の調査にも参加でき、当時最先端の機器を使った調査方法や著名な学者達の調査の様子を近くで学ぶことができたのは本当に幸運だった。

北京大学大学院では、馬世長教授

のもとで仏教考古学を学んだ。河北省南響堂山石窟に1年近く住み込み、石窟遺跡の記録・調査方法の基礎を叩き込まれた。現在では石窟の調査記録にも3Dレーザースキャンなどの先端技術が応用されて便利になったが、当時は方眼紙と鉛筆などを駆使しての記録調査だった。しかし好きなだけ時間をかけて対象物と向き合えたこの響堂山調査は非常に貴重で幸せな経験であった。

博士課程では、「中国仏教はさまざまな文化が融合した複合文化であり、仏教遺跡だけを見ても理解することはできない」との教えに従い、東西文化交流考古学の教鞭を執っていた林梅村教授の門を叩いた。

「林先生からは仏教考古学に軸足を置きつつ、多方面から観察することの重要性を教えていただきました。講義の後にはほぼ毎回食事に連れて行っていたいただき、林梅村先生門下の学生同士でさまざまな問題について議論しあったのはとても良い思い出となっています」



南響堂山石窟。

東西文化交流史において中心となるのはシルクロードである。フィールド調査に魅力を感じ、その後も多くの遺跡調査に携わった。

「やはり外に出て、いろいろな見えて歩けるのが考古学の一番の魅力ですね。考古学の調査は多くの人が参加するチームプレーなので、いろいろな人とずっと一緒に過ごし、同じ釜の飯を食べてキャンプのような楽しさがあります」

篠原先生のシルクロード研究は、



河南省の龍門石窟・賓陽中洞にて。北魏の時代に造営されたもので、高さ8.4mの釈迦牟尼像がほほえみかけてくれる。

中国から出発し、東から西へと移動し、西欧にたどり着くスタイルだった。「シルクロードは特にどの地方に興味を持ったというわけではありません。どこも興味深いですね。ヨーロッパに行ったときも、これは中国で見たものと似ているなと感じることも多かったし、文化の影響の痕跡を見ることができるのが面白いところですね」

壁画をはじめ、明清時代の民間宗教遺跡の調査研究だという。「仏教寺院や道教寺院などで学ばれるような体系的な宗教ではなく、さまざまな宗教や思想、民間伝承のエッセンスを煮詰めたような民間宗教にこそ生活者の真の願いがこめられているように思うのです」

現在、こうした民間宗教遺跡は都市開発や近代化の影響によって、取り壊しが進んでおり、減少しているのが実情だという。遺跡の保護につ

いても現状を調査して記録しておくことが重要だと篠原先生は述べる。

異文化理解のためにも 考古学を学ぶ意義は 少なくない

現代に生きる我々が考古学を学ぶ意義について、篠原先生は次のように語る。

「考古学は土器や瓦など、どこにでもあつて誰もが必要としている『モノ』を主要な研究対象としています。そのようなありふれたものの中に価値を見出し、歴史の中に位置づけることができます

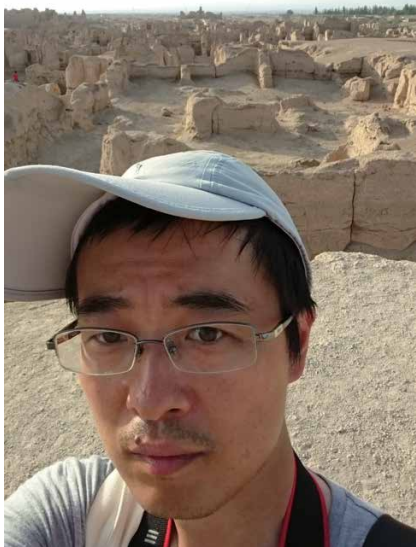
考古学は、歴史の表舞台にはあまり出でこない、しかし人類の歴史をしっかりと支えている普通の人々の姿を浮かび上げさせてくれます。

現在は重要な考古学遺跡が世界遺産に

登録されるなどしており、多くの人々に知られるようになってきています。こうした遺跡をどのように活用し、次の世代に伝えていくのかも大きな課題です」

一つひとつは歴史の断片に過ぎない文物であっても、それを拾い上げ、人類が営んできた歴史を紡いでいくという作業は、大きな意義を持つ。そうした長い歴史を経てきた文物を後世に残していくことは、現代に生きる我々の責務なのだ。

また、日本はその国の成り立ちから中国大陸と深く関わり、文化的、政治的な影響を受けてきた経緯がある。現在、国際的にも中国の存在感



トルファン交河故城。



ロンドンの大英博物館。世界最大ともいわれる博物館であり、洋の東西を問わず数多くの文化財を収蔵展示している。

が増してきており、さまざまな場面で中国と関わることが多くなっている。

「今の中国をより深く理解するためにも、中国の歴史を知ることが肝心です。考古学は文献には書かれなかった歴史を復元することができ、より立体的な歴史像を把握することができます。」

また、異文化交流は現代特有の間

題ではなく、長い歴史の中で常に行われてきたことです。文化交流の歴史を知ることが、他者とうまく付き合うための方法を学ぶことでもあります」と、異文化理解にも考古学が果たす役割は大きいと語る。

その上で、これまでの留学経験や発掘調査などで、多くの外国人と接してきた篠原先生は、異文化理解について次のように力説する。

「私の常識はか

れらの非常識」ということは絶対に理解しておく必要があると思います。自分が生きてきた文化的背景というものも、歴史的な流れの中にあるんだということを理解していれば、相手から指摘されたことで理解できないことも、その存在そのものを否定しては

いけない。相手の言うことを何でもかんでも受け入れるのは難しいと思うのですが、受け入れられないものが存在するのは当然だし、どこまで受け入れられるかというのを、交渉していけばいいのです。

お互い違って当然という前提からコミュニケーションを始めることができればいいのではないのでしょうか」

高校生の皆さんへ

大学生は研究者の卵です。その卵から何が孵るかは、大学4年間でどのような栄養を与えることができるかにかかっています。なりたい自分の明確なビジョンがあれば、そのイメージに向かって進んでください。明確なビジョンがなければ、とにかく何でも見てみましょう。

総合政策学部には各分



古建築調査。

野で活躍している研究者がそろっており、多くの選択肢を用意しています。道は一つではありません。必ずあなたに合った道を見つけることができるでしょう。

大学生になったら、さまざまなとにチャレンジして、主体的な学びの姿勢を身につけてほしいと思います。自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の足で歩けるようになることが、その後の人生において何よりも大切なのだと思います。